

古代語に於ける〈終止形による条件表現〉に関する考察

— 院政鎌倉期を中心に —

京 健 治

一 はじめに

山田孝雄氏『平家物語の語法』に以下の記述がある。

終止形の終止の用法に立てるもの、用例中、特別の現象を呈するものあり。即ち次の如く條件を並列して示すかの如くに用ゐたるものなり。

船ハ少シ浪風ハハケシカリケリ踏沈メテ一人モ不殘皆

死ニケリ（四、三十九、オ）

暗サハクラシ雨ニキニイテ降ル道ハセハシ心ハ先ニト
ハヤレトモ不及力道ナレバ馬次第二ソ懸タリケル（二末、
五十八、ウ）

これらは、この「終止形」にて示されたる述語を有する句が、次なる句の条件なるかの如き意味を呈するものなるを以て、普通の終止と同一視すること能はず。恐らくは、かくの如き用法より更に転じて、後世の「し」にて語を重ねる方法

を生ずるに至れるものにあらざるか、後の検討を要する事項たり。
^(正)

この記述は〈終止形〉にて示されたる述語を有する句が、次なる句の条件なるかの如き意味を呈するものがあるとの指摘である。また、岩波日本古典文学大系本『平家物語』（上）「解説」では、

センテンスがはつきり切れているのかそうでないのか、はつきりしないものが多い。富倉徳次郎氏は、一般に終止法をとつた形を中止法に用いているものをこの時代から見える用法としておられるが、これは平家に多い。

のように、『平家物語』に於ける当該語法の多用を指摘し、「この終止法の形は、時に二つ重なり、条件を表す意味になっているものもある。」とし、次の例を示す（＝（一））。

(1) 所はひろし、勢は少し、まばらにこそめえたりけれ。

(平家物語・御輿振)

(1) は「場所は広いし、軍勢は少ないので、まばらに見えた」の意であり、「所はひろし、勢は少し」の箇所は、下句「まばらにこそめえたりけれ」の理由となつていと解されるものである。

このように、院政鎌倉期において、「終止形」を有する句が下句との関係上、(原因・理由)を示す用法(以下、「終止形条件句」と呼ぶ)が多用されることを指摘するものが多いのであるが、その要因について、これを正面から論じたものは意外と少なく、管見によれば、京極興一氏「終止形による条件表現——『平家物語』を中心として——」(成蹊大学文学部紀要)第一号・一九六五年)があるに過ぎない。京極論文では(終止形条件句)の構文上の特徴を明らかにされ、さらに、その表現性を踏まえながら、中世前期の説話集や軍記物に多用されるのかについて考察されており、示唆される点が多い。

しかしながら、後述するように、その表現性の来由については別の見方も出来そうに思われる。さらに、(終止形条件句)の表現性との関連で示されたところの院政鎌倉期に於ける多用の理由についても改めて考え直してみる必要もありそうに思われる。そこで、本稿では(終止形条件句)の用法上の特徴を記述し、そこ

での考察を手がかりに何故に院政鎌倉期において多用されるようになったのか、その理由についても考えてみようと思う。

二 (終止形条件句)の構造と意味用法

京極氏は「平家物語」に於ける(終止形条件句)に関して、次のように説かれる。

其後熊谷はのりかへにつておめいてかく。平山も熊谷親子がたたかまざれに、馬のいきやすめて、是も又つゝいたり。平家の方には馬にのつたる武者はすくなし、矢倉のうへの兵共、矢さきそろへて、雨のふる様にあけれども、敵はすくなし、みかたはおほし、勢にまぎれて矢にもあたらず、ただおしなべてくめやくめと下知しけれ共、平家の馬はのる事はしげく、かう事はまれなり、船にはひさしうたてたり、よりきつたる様なりけり。熊谷、平山が馬は、かにかうたる大の馬共なり、ひとあてあてば、みなけたおされぬべき間、おしならべてくむ武者一騎もなかりけり(巻九、一二之懸)

右の例文において、傍線をつけた語はいずれも終止形で、表現形式としては完結しているが意味上からはそこで完結せず、文の一部分として下句に続くと考えられる。従つて、かかるものは、文を構成しているのではなく、文と語との中間

的存在としての句を構成している終止形とすべきであらう。

更に、右の例の場合、

武者はすくないので

敵はすくないし、味方は多いので

かう事はまれであるし、船にはひさしくたてているので

大の馬どもなので

のように、順態の確定条件を表している（「敵はすくなし」「かう事はまれなり」も、直後の句とともに条件格に立つことはいうまでもない）。

右に引用した通り、『平家物語』には、終止形による条件表現見られることを示し、〈終止形による条件表現〉の形式上の特を次のように述べる。

係助詞「は」（または「も」と終止形の呼応の形で用いられている。すなわち、この語法は終止形だけにかかわるものでなく、

―は（も）―終止形

の形をとる、ということがいえそうである。もとより、この形をとらないで条件句として用いられるものもあり、この形をとつても条件句とならないものが多いことはいうまでもない。しかし、まぎれなく条件句を構成していると見られるもの

の大部分がこの形をとっているのであって、いわばこの語法の典型的な表現形式と考えられる。

のように、この語法の文型としては「―は（も）―終止形」という文型が特徴的であることを指摘する。さらに、こうした文型を踏まえて、当該語法の表現性についても言及されている。京極氏は、『平家物語』中、この語法のほとんどが合戦あるいは火事などの非常事態の描写の中において使用されていることに着目され、「合戦」という緊迫した事態を描写するためには、前代の王朝文学の表現はもちろん役に立たず、恐らく、将門記や今昔物語集の合戦譚などの上になつて、新たな表現を意図したであらう」と述べられる。なお、ここにいう「新たな表現」に関しては、

この語法が単なる条件表現であるならば、右のように合戦などの非常事態の描写にのみ用いられることはありえない。接続助詞を伴った条件句と同様に、もつと自由に用いられるはずである。たとえば、

舟はちあさし、くるとふみかへしてんげり（巻九、落足）の終止形「ちあさし」は「ちあさければ」と同じではない。下句に対しては条件格に立ちながら「ちあさし」と表現することによって、特別な表現価値、恐らくは緊張した力強さが付加されているはずである。

のように、「緊張した力強さ」という表現性が存するとされる。

また、こうした表現性——「緊張した力強さ」——の来由については、終止形終止法の機能面をもとに、次のように説かれる。

このような表現価値（Ⅱ「緊張した力強さ」；京注）

の由

来を考えるためには、終止形の、表現形式を完結させ文を終止させるという基本的な用法をぬきにすることはできない。

「ちあさし」は条件句を構成し下句にかかるのであるが、それにもかかわらず、そこで断止しようとする力を有する。この断止しようとするはたらきが、印象の鮮明さを生み、断止とともに言外に条件的関係を示すことが、簡潔さを生み、更にそれらは力強い緊張した表現として受け取られるにいたるのではあるまいか。

京極氏は終止形による条件表現は「緊張した力強さ」という表現性を有しており、こうした表現性が「合戦」「火事」といった「非常事態」を描写するうえで効果的な表現であつたとされるが、その「緊張した力強さ」といった表現性については、なお考察の余地があるのではないかと思われる。（3）を参照されたい。

（3） a 去んじ嘉応二年十月十六日、小松殿の次男、新三位中

將資盛卿、其時はいまだ越前守とて十三になられける

が、雪ははだれにふったりけり、枯野のけしき、誠に面白かりければ、若き侍ども卅騎ばかり召しすゑさせ、うづら雲雀を、おつたておつたて、終日にかり暮らし、薄暮に及んで六波羅へこそ帰られけれ。

（平家物語・巻第一・殿下乗 合）

b 年ハ若シ形ハ美麗也。オモ賢ク駿モ有レバ、世ノ人

皆ヲ憑ヲ懸タル人多クシテ惜ミ合ヘルモ理也。

（今昔物語集・卷一九・二三）

（3）には「――は――終止形」条件句が見られるが、これらには特段、緊張した力強さという表現性は感じられないように思う。例えば、（3a）の「雪ははだれにふったりけり、枯野のけしき、誠に面白かりければ」の箇所は、条件節を構成しているが、ここでは、情景の美しさが描写されている。また、（3b）の「年ハ若シ形ハ美麗也。オモ賢ク駿モ有レバ」は条件節を構成しているが、ここに挙げられた事柄は「年は若い」「姿は美麗である」「才能もあつて靈験の効き目もある」であり、緊張した力強さという表現性はなさそうに思う。

先述の如く、「終止形による条件表現」は院政鎌倉期の説話集や軍記物に多く見られるが、この語法自体は平安期にも見られるものであり、「緊張した力強さ」といった表現性が見受けられないものも拾いあげられる（Ⅱ（4））。

(4) a いみじう暑き昼中に、いかなるわざをせむと、扇の風

もぬるし、氷水に手をひたし、もてさわぐほどに、

(枕草子)

b これは、みな人のしろしめしたる事なれば、こともな

がし、とどめ侍りなん

(大鏡・第一巻・六十四代田融院)

(4a)「扇の風もぬるし」の箇所は、その後の「氷水に手をひたし」の理由(＝扇の風もぬるいので)となっている。(4b)「こともながし」も同様で、ここでは、「話すと長くなるので、(留めておこう)」の意味であり、「とどめ侍りなん」の根拠となるものである。いずれも終止形条件句とみられるが、両場面ともに、特に緊張した場面で使用されているというわけではない。こうしたことからすると、京極氏が「合戦という緊迫した事態を描写するためには、前代の王朝文学の表現はもちろん役に立たず、恐らく将門記や今昔物語集の合戦譚などの上になつて、新たな表現を意図したのであろう」とされたところの、当該語法の表現性(＝「緊張した力強さ」及びそれとの関連から説かれるところの多用の理由についても今一度考え直してみる必要もありそうに思われる。先行研究が指摘するように、「今昔物語集」「平家物語」といった院政鎌倉期の説話集や軍記物に於いて、終止形条件句が多く見られるのは事実である。こうした語法の多用について、それが説

話や軍記物といったジャンル故に多用されるのか、あるいは、院政鎌倉期という時期に何かしら関係するのか、このあたりのことを考えて見る必要があるように思う。

三 「不十分終止」の諸相

終止形を述語とする句が下句との関係から見ても、原因・理由を表すものがあることを見たが、このように、そこで、完全に文が終止せず、後続の文と間に、何かしらの意味的關係性を有するものには、先の条件句を構成するものの他に、並列句を構成しているものも見られる。以下、こうした用法を「不十分終止」と呼ぶことにする。

古代語の「不十分終止」については、小田勝氏「古代語構文の研究」(平成十八年・おうふう)に詳しい。⁽⁴³⁾そこで示された例を引きながら、古代語の「不十分終止」用法の様相を確認していくことにする。

後掲の(5)(6)は対句的表現での例である。なお、並列的關係を示す用法にあつても、その並列の示し方には、いくつかのタイプが見られる。(5)は前項・後項ともに、(終止形)を述語とするものが並立されたものである。また、(6a)「勝ルル時モ有リツ劣ル時モ有テ」、(6b)「年ハ老ニタリ事ヲ縁モ無クテ」のように、前項が(終止形)、後項が(テ形)を取るものもある。

b) は、前半部「年ハ老ニタリ事ヲ縁モ無クテ阿闍梨ニモ難成タ」と後半部「憑ミ奉ル君ハ失セ給ヒヌ」との並立表現である。

(5) a この世の人は、男は女にあふことをす、女は男にあふことをす。
(竹取物語)

b 御車もいたくやつし給へり、前駆も追はせ給はず、誰とか知らむとうちとけ給ひて、すこしさしのぞき給へれば、
(源氏物語・夕顔)

(6) a 年来我ニ挑ミ競テ、勝ルル時モ有リツ劣ル時モ有テ年来ヲ過ツルハ、此シ必ズ只人ニハ非ジ。
(今昔物語集・一四・四〇)

b 年ハ老ニタリ事ヲ縁モ無クテ阿闍梨ニモ難成タ、憑ミ奉ル君ハ失セ給ヒヌ。
(今昔物語集・二〇・三五)

(7) は終止形を述語とする句が下句との関係から見て、原因理由を表す例である。

(7) a 「……」と高やかに言ふを、聞きすぐさむいとはし、しばし休らふべきに、はた、侍らねば、げにそのにほひさへはなやかに立ち添へるもすべなくて、逃げ目を使ひて、…
(源氏物語・帶木)

b いみじう暑き昼中に、いかなるわざをせむと、扇の風

もぬるし、氷水に手をひたし、もてさわぐほどに、

(枕草子)

c 大の男の鎧着ながら、馬より舟へがはと飛び乗らうに、なじかはよかるべき。舟はちひさし、くるりとふみかへしてンげり。
(平家物語・落足)

d 「…されども思ひたつならば、そこに知らせずしてはあまるまじきぞ。夜もふけぬ、いざや寝ん」と宣へば…
(平家物語・小宰相身投)

(7) に示したものは、原因理由となる事態が一つ挙げられるものであるが、終止形を有する句が複数列挙されるものもある(後掲(8))。

(8) a 公助ニ走り懸リテ打ムト為ルニ、公助ハ若ク盛也、父敦行ハ八十余ノ者也、公助逃ムニ追ヒ可付クモ非ズ。
(今昔物語集・一九・二六)

b 平家のかたには馬に乗つたる武者はすくなし、矢倉のうへの兵ども、矢さきをそろへて雨のふるやうに射けれども、敵はすくなし、みかたはおほし、勢にまざれて矢にもあたらず。
(平家物語・一二之懸)

c 同廿三日の暁、宮は、「此寺ばかりではかなふまじ。山門は心はりしつ、南都はいまだ参らず。後日にな

ッてはあしかりなん」とて、三井寺をいでさせ給ひて、南都へいらせおはします。
(平家物語・大衆揃)

また、(9)のように、原因理由が示される場合、後項が接続助詞「ば」の形を取ったものもある。

(9) a 船ハ疾ク出ツ虎ハ落来ル程ノ遅ケレバ、今一丈許不 踊

着シテ虎海ニ落入ヌ。(今昔物語集・二九・三一)

b 雨ハ痛ク降ル、夜ハ深更ヌレバ、今夜許ト思テ、此ノ

墓穴ニ入テ候フ也 (今昔物語集・二八・四四)

c 城の内の兵共、しばしさへてふせぎけれども、敵は大勢なり、みかたは無勢なりければ、かなふべしとも見えざりけり。
(平家物語・火打合戦)

さて、本稿の主眼は、終止形による条件表現が、院政鎌倉期に於いて多用されるに至ったという指摘を承けて、その理由を探ることにあるが、先述の如く、「不十分終止」用法には、条件句を構成するものばかりではなく、単に並列句を構成するものもあるため、そのことを考えるにあたっては、「不十分終止」用法全般を視野に入れて、その語法の性格を明らかにする必要があるように思う。そこで、次節以降では、「不十分終止」用法の表現特性を検討し、院政鎌倉期に於ける〈終止形条件句〉の多用の経緯を

考えていくことにする。

四 「不十分終止」と〈条件表現〉

ここでは、〈終止形による条件表現〉について、その意味用法に着目して、当該語法の性格をもう少し詳しく見てみることにしよう。

(10 a) は、大の男が「くるりとふみかへしてンげり」となった理由として、「舟が小さい」ことがその理由であったことを示している。(10 b) は、矢を射るが当たらないという事態に対する理由として、「敵が少ない」と「味方が多い」ことが、その理由として挙げられている。(10 c) では、虎が届かなかったことに対して、その理由として、「舟が速く出た」のに対して、虎が落ちてくるのが遅かった」という事態が提示されている。

(10) a 大の男の鎧着ながら、馬より舟へがはと飛び乗らうに、なじかはよかるべき。舟はちひさし、くるりとふみかへしてンげり。
(平家物語・落足)

b 平家のかたには馬に乗つたる武者はすくなし、矢倉のうへの兵ども、矢さをそろへて雨のふるやうに射れども、敵はすくなし、みかたはおほし、勢にまぎれて矢にもあたらず。
(平家物語・一二之懸)

c 船ハ疾ク出ツ虎ハ落来ル程ノ遅ケレバ、今一丈許不踰
着スシテ虎海ニ落入ヌ。(今昔物語集・二九・三一)

(10) は、ある事態の生起に対する理由となる事態・状況が(終止形条件句)を以て表されている。

《終止形による条件表現》には、右のような事態生起に関する因果関係を述べるもの他にも、判断の根拠となる事態(波線部)を提示するものもある(Ⅱ(11)(12))。

(11) a 雨ハ痛ク降ル、夜ハ深更ヌレバ、今夜許ト思テ、此ノ
墓穴ニ入テ候フ也 (今昔物語集・二八・四四)

b 城の内の兵共、しばしさへてふせぎけれども、敵は
大勢なり、みかたは無勢なりければ、かなふべしとも
見えざりけり。(平家物語・火打合戦)

(11 a) では、「墓の穴に入る」ことの根拠として、「雨ハ痛ク降ル」ことと、「夜ハ深更ヌ」ことが示されている。(11 b) も同

様に、城の内の兵たちが、しばらくの間は、防戦しているが、「敵が多い」こと、「味方は少ない」ことを根拠として、「かなうとも思えなかった」という判断を導いている。

(12) a 「……されども思ひたつならば、そこに知らせずしては

あるまじきぞ。夜もふけぬ、いざや寝ん」と宣へば、

(平家物語・小笠原相身 投)

b 同廿三日の暁、宮は、「此寺ばかりではかなふまじ。

山門は心がはりしつ、南都はいまだ参らず。後日になつてはあしかりなん」とて、三井寺をいでさせ給ひて、南都へいらせおはします。(平家物語・大衆 揃)

c 我レニ於テハ、年モ老タリ、指セル事无キ身ナレバ、死ナムニハ何事カ有ラムト
(今昔物語集・二〇・四四)

(12 a) は、「夜も更けてしまったので、さあ寝よう」という意味で、「夜も更けぬ」という状況をもとに、「いざや寝ん」という判断内容を提示している。(12 b) では、「山門は心がはりしつ」「南都はいまだ参らず」という状況をもとに、「後日になつてはあしかりなん」という判断が導かれている。(12 c) では、「年モ老タリ」「指セル事无キ身ナリ」を根拠とし、「死ナムニハ何事カ有ラム」という判断が導かれている。

五 「―は(も)――終止形」による並列の機能

(Ⅰは(も)――終止形「条件句」)には「一つの事態が下句との関係から見て原因理由を示すもの」と「複数の事態がひとまとま

りとなり、下句との関係から見て原因理由を示すもの」とが見られるが、後者の用法について、以下の二点が特徴的であるといえよう。

① 列叙しようとすれば理論的はいくつでも並べ立てることが可能である。

② 列叙されるところの個々の事柄の間に時間的な先後関係が含まれない。

まず、①の点について見ていくことにしたい。後掲(13)では傍線部「既二夜ニハ成ヌ、従者ハ无シ。三条京極ノ辺ハ遙也」が波線部「何ガハ可為カラム」という判断を起こさせる理由となっているが、ここに見るように、その理由として、「既二夜ニハ成ヌ」「従者ハ无シ」「三条京極ノ辺ハ遙也」の三つの事態が提示されている。

(13) 兄此レヲ聞クト云ヘドモ、既二夜ニハ成ヌ、従者ハ无シ。

三条京極ノ辺ハ遙也。何ガハ可為カラム。

(今昔物語集・二七・三三)

ちなみに、(14)は条件句を構成するものではないが、「―は(も)―終止形」形式に於ける列叙の性格をみる上で参考になろう。

(14) 田もなし、畠もなし。村もなし、里もなし。おのづから人はあれども、いふ詞も聞き知らず。(平家物語・有王)

(14) では、「田もなし」「畠もなし」「村もなし」「里もなし」が列挙されているが、この「―は(も)―終止形」は自体が形式上完結した形式であるため、右のような三つ以上の事態の列叙が可能となる。このように、終止形条件句は「―は(も)―終止形」というそれ自体が形式上、独立したものであることから、並べあげようと思えば、理論的はいくつでも並べることが可能となる。次に②について見てみよう。

(15) そのなかに宮の御めの子、六条大夫宗信かたきはつづく。馬はよわし、に井野の池へ飛んでいり、うき草かはにとりおほひ、ふるひぬたれば、かたきはまへをうち過ぎぬ。

(平家物語・巻第四・宮御最期)

(15) 「かたきはつづく、馬はよわし」は下句「に井野の池へ飛んでいり」の理由となっている。ここでは前項が動詞述語句、後項が形容詞述語句が列挙されている。すなわち、動作的な事態と状態的な事態が並列されているが、これらは対等の関係で並べられている。

こうした並列用法の性格について、例えば、(連用形(+)て)形式と対照すると、その用法上の特徴がより明らかになる。

(16) a ここには日本酒もあつてワインもあつて焼酎もある。

b 朝ご飯を作つて、子供を起こした。
【並列】
【継起性】

テ形の場合に於いて、並列的關係となるのは、状態的な語が並べられる場合であり、動作的な語では、基本的には継起性を伴うことになる。

(17) a めずらしい人から手紙をもらつてうれしかった。

b あの本は値段が高くて買えなかった。
【理由】
【理由】

(17) に示すように、動詞と形容詞とが「テ」で繋がれる場合、テ形は〈理由〉を表すことになる。前掲(15)に示したような終止形条件句による並列の場合、動作的な事態であっても、状態的な事態であっても、それを時間的な先後關係を示すことなく、列挙されているわけである。このように見てくると、〈―は(も)―終止形―条件句〉の用法上の特徴は、その並列の機能に求められるのではないかと考えられる。

さて、ここで、当該語法が院政鎌倉期の説話集や軍記物に於いて、多用されることについて、少しばかり触れておきたい。

京極論文では、当該語法が「火事」や「合戦」といった場面での描写での多用に注目されているが、そうした場面での使用につ

いては、先に述べた「不十分終止」用法の有する並列のあり方との関わりから捉えることができそうに思われる。すなわち、「合戦」「火事」といった「非常事態」に於いては様々な事態が同一時空上に生起しており、それらの複数の事態が要因となつて、別の事態が引き起こされたりすることもある。また、様々な状況をもとにした上で、何らかの判断が下されることもある。複数の事態の列挙が可能であり、且つその列挙されるところの事態間に時間的な先後關係が含意されない「―は(も)―終止形」による並列表現形式はこうした状況を描写する際に効果的であつたものと思われる。

六 〈終止形条件句〉の多用とその歴史的背景

以上、〈―は(も)―終止形―条件句〉の表現性について考えて来たが、この語法に関しては、何故、院政鎌倉期に多用されるようになったのかという問題が残されている。以下、この点について考察することにした。

(18) a 大の男の鎧着ながら、馬より舟へがはと飛び乗らうに、なじかはよかるべき。舟はちひさし、くるりとふみかへしてンけり。
(平家物語・落足)

b 平家のかたには馬に乗つたる武者はすくなし、矢倉のうへの兵ども、矢さきをそろへて雨のふるやうに射け

れども、敵はすくなし、みかたはおほし、勢にまぎれて矢にもあたらず。

(平家物語・一二之懸)

c 城の内の兵共、しばしささへてふせぎけれども、敵は大勢なり、みかたは無勢なりければ、かなふべしとも見えざりけり。

(平家物語・火打合戦)

(18) に示すような「は(も)―終止形」という形式を取り、(原因理由)となるものが多用されるようになったということは、従属句として機能するものが多くなったことを意味するといえよう。本来、終止法として機能していた当該形式が、文末用法ではなくなっているものが増えているということになるが、そうしたことの背景にあったのは連体形終止法の一般化する現象ではなからうか。

(19) a みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人の音信もせぬ

古今和歌集・三二七

b 夏草の露分け衣着けなくに我が衣手の乾る時もなき

(万葉集・一九九四)

c 雀の子をいぬきが逃がしつる。

(源氏・若紫)

d 仏を紛れなく念じ侍らむとて、深くこもり侍るを、かかる仰言にて、まかり出ではべりし。

(源氏物語・手習)

上代中古においては和歌・会話文に限られており(19)、それは曲調終止という性格のものであったが、院政鎌倉期には地の文にも見られるようになるなど、通常の終止法に与るようになった。

(20) カシコナル女ノ頭ニケタモノ、アブラヲヌリテラル

(三宝絵・中)

こうした連体形終止法の擡頭は、「は(も)―古典語終止形」で為されていた形式が「は(も)―古典語連体形」へと転ずることからもうかがえよう。

(21) a 蟬ノ云ク「此屋所ハ倉共ノ跡ニ候ヒケル。」

(今昔物語集・二六・三)

b 汝仏ノ御弟子ト名乗テ「仏ハ虚言无キ」ト云テ

(今昔物語集・一九・一四)

〈終止形条件句〉の多用をみる院政鎌倉期は、右に見たような連体形終止法が擡頭していく時期に当たる。

先に「は(も)―終止形」という形式による条件句の多用の意味について、本来的に文終止に与っていた形式が、従属句とい

う文中での使用が多用されるようになったものと捉え直すことが出来る。と述べたが、こうした語法が院政鎌倉期において多用されるに至ったのは右に見たような連体形終止の一般化——終止形終止の位置付けが変わってきたこと——と関係があるのではないかと考えられる。

もっとも、『今昔物語集』『平家物語』などの院政鎌倉期の文獻においては、地の文の終止法としては古典語終止形が現れるのであり、口頭語として、連体形終止がどの程度行われていたのか、不明な点があるが、先にみたような院政期頃の連体形終止文のあり方からすると、口頭語では文終止にあつては連体形終止法が定まらう。

(22) a 取毛直サスカニナク、シ。タ、トラセムモ極テ嗚呼ナリ。
《草案集》

b おりふし風ははげし、くろ煙おしかくれば、平氏の軍兵共餘にあはてさはいで、若やたすかと前の海へぞおほく馳いりける。
《平家物語・九・坂落》

シシ語尾形容詞の成立事情については、鈴木丹士郎氏を始めとし、慶野正次氏、北原保雄氏、辛島美絵氏などによる研究があるが、シシ語尾という語形の成立について、北原氏に示唆的な見解がある。北原氏はシシ語尾となるものはシク活用形容詞であることと、さらに、それが中世前期以降発生するという時期に着目し、その成立を《口語形「ーイ」語尾からの再構によるもの》と説かれる。すなわち、連体形終止法の一般化により、形容詞の口頭語での終止法は連体形「ーい」となっていた。そうした口頭語終止形から擬似文語形として再構されたのが、「ーシシ」語尾であり(一)(23)、口頭語の「ーイ」語尾を「シ」に置き換える形で為ったものであるという。

(23) a 小さい、小さし【ク活用】
b はげしい、はげしし【シク活用】

シシ語尾形容詞の発生事情については北原氏の見解に尽くされているが、「ーイ語尾」からの再構であるとすれば、やはり当時、口頭語において「ーイ語尾」が行われていたと見ることができよう。《は(も)——終止形》条件句が当該時期に発達したのは右に見るような連体形終止の一般化に伴う文終止のあり方の転換がその背景にあつたのではないかと思われる。

七 おわりに

以上、本稿では、「―は（も）―終止形」条件句の用法上の特徴について考察を加え、さらにこの語法が院政鎌倉期に発達したのは何故か、その歴史的背景についても言及した。

「―は（も）―終止形条件句」は、「列叙しようとするれば理論的にはいくつでも並べ立てることが可能であること」、「列叙されるところの個々の事柄の間に時間的な先後関係が含意されないこと」という性格を有する点に特徴的であるといえる。原因・理由となる事態を列挙するという点で、右記の並列用法上の特徴を以て多用されることになったものであろう。そして、こうした語法が院政鎌倉期に多用されるに至った背景として、連体形終止法の一般化に伴う文終止のあり方の推移が関係しているのではないかと思われる。

注

- (一) 「接続助詞」の成立に関する論考には、柏原司郎氏「接続助詞「し」の成立をめぐって」〔田辺博士古希記念国語助詞 助動詞論叢・昭和54年〕、同「接続助詞「し」の成立についての補遺考」〔国語研究〕43・昭和55年、鈴木浩氏「接続助詞「し」の成立」〔文芸研究〕64号・平成2年、拙稿「接続助詞「し」の成立過程」〔島大国文〕28号・平成12年）等がある。

(二) 「不十分終止」なる用語は、鈴木浩氏「接続助詞「し」の成立」

- 〔文芸研究〕六四号・平成二年）による。なお、これは、松下大三郎氏「標準日本口語法」〔昭和五年・中文館書店〕に於いて、格関係の観点から、終止形を有する句がそこで切れずに、意味的に後に続くものを「不十分終止格」としたものに基づく。
- (三) この他岩田美穂氏「例示を表す並列形式の歴史的变化」〔青木博士編「日本語の構造変化と文法化」・平成19年・ひつじ書房、鈴木浩氏注一論文、拙稿「並列列挙表現形式の推移」〔島大国文〕26号・平成10年2月）等。

- (四) 鈴木丹士郎氏「形容詞「し」について」〔国語学研究〕3・昭和38年、慶野正次氏「形容詞一元論の再検討―「悪しし」型形容詞の発生について」〔神戸学院女子短大紀要〕6・昭和49年、北原保雄氏「形容詞の語音構造」〔中田祝夫博士功績記念国語学論集〕／昭和51年、辛島美絵氏「しし語尾形容詞について―仮名文書の例を中心に―」〔国語国文〕69巻6・平成12年6月）〔「仮名文書の国語学的研究」／平成15年10月・清文堂）収録。

(五) 注四北原氏論文、辛島氏論文。

(六) 注四辛島氏論文に鎌倉期以前の用例が示されている。

〔付記〕本稿は、二〇一五年度～二〇一七年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））研究課題番号15K00000研究課題名「並列表現形式の生成と展開に関する研究」の成果の一部である。

（きょ うけんじ 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授）